母

坂口安吾

青空文庫

畏友辰夫は稀に見る秀才だったが、発狂してとある精神病院へ入院した。辰夫は周期的に発狂する遺伝があって、私が十六の年彼とはじめて知った頃も少し変な時期だった。これ迄は自宅で療養していたが、この時は父が死亡して落魄の折だから三等患者として入院し、更に又公費患者に移されていた。家族達は辰夫の生涯を檻の中に封じる所存か、全く見舞にも来なくなった。

辰夫は檻の中で全快したが、公費患者の退院には保護者の保証が必要であるし、それに辰夫は三等患者時代の費用が百円程借りになっていたので、退院することが出来なかった。辰夫は狂人達と一緒に檻の中で封筒を貼っていたが、一日七銭の稼ぎになると言っていた。

そういうわけで他に訪れる人がなかったので、辰夫は私一人を心待ちにして暮した。ところが私は性来最も頼りにならない男で、自分の親切さには凡そ自信を持たないから、人に信頼されたりすると重苦しくて迷惑するのであった。併し辰夫は毎日の面会が終る度に必ず目に泪を泛べて、「又明日もきっと来て呉れ給えね、君一人を待暮しているのだから」と言い乍ら痩せ衰えた指を顫わせ私の手首をきつく握るものだから、私も余儀なく毎日のように病院へ足を向けた。

初めのうちは寧ろ病院へ行くのが珍らしくもあった。厳めしい石門を潜ってだらしなく迷い込む瞬間から、私も一人の白痴のようにドンヨリしてしまう精神状態が気に入ったり、それに私は、その頃辰夫のほかに全く友達を持たなかったので退屈を持余していたから。それに又全快し乍ら狂人で暮す此の秀才の物語るところが、その奇怪な心境を通して眺められた此の病院の様々な風変りな出来事や、それに対する鋭いそして奇妙な彼の観察や批評等、全てが興味深いもので、いわば私は全く打算的に、面白ずくで此の病院へ日参していた。

ところが暫くするうちに、私達の間には話の種が尽きてしまった。私達は面会の時間中ボンヤリと屈託して、沈黙に悩むあまり、時々自分乍ら思いもよらない言葉を不意に喉の外へ逃がして気まずい目を伏せ合ってしまう。心に泛ぶこともないので、明日からは断々乎として訪問を止そうと、私は頻りに其の愉しさを思いはじめるのであった。すると鋭敏な辰夫は勝れた神経で忽ち私の胸中を推察し、別れ際には尚劇しく慟哭して、「迷惑だろうけれど明日も又、ね。君が来てくれないことになると僕は夕暮れを待つ力も失ってしまう……」そう言い乍ら思いがけない強い力で私の手首を握るので、その突嗟に私ははや明日の負担にフラフラし乍ら、長い廊下を消え去るように歩きはじめるのであった。すると看護人に伴なわれた辰夫は別な廊下へ——そこには鉄の扉が三ヶ所にも鎖されているが、まるで私をも幽閉する音のように鋭い金属の響を放ち、彼等の去り行く跫音と共に次々に開閉される憂鬱な響が地獄のような遠方から聞えてくる。矢張り明日も来なければならないと、悲痛な思いで決意を強いられる次第であった。

ところが此の病院では私の心掛けが殊勝だというのであろうか、三十分に規定された面会時間を一時間に——ああ延長してくれた。この恩典の手前としても私は今日は齲歯が痛むからという言訳で五十五分に切上げる分別さえ出来ないのであった。マラルメは頽廃派だから歯が痛むと唄っているが、私は齲歯を痛めてもならない。斯

うして日毎に私達は一時間に零す語数が無に近い程減少して、私達の肉体も無になるのではないかと疑わねばならなかった。

　併し私は病院のほかに辰夫の家庭へも足繁く通わねばならなかった。つまり早く退院の手続をとるように願うのが第一で、百円の金が急の間に合わなければ、差当ってチーズやバタの類い――というのが、辰夫の家では父の没後小さな食料品店を開いていたので、そういう物を届けるように依頼するのが役目であった。公費患者は一ケ月の食料が一人当三円というので、殆んど残飯だけを食わされていたらしい。

　辰夫の母は、これが又私の苦手であった。重なる不幸でヒステリイが激していた所為もあるし、本来辰夫に遺伝するだけのものを此の人も充分具えていたから、話が世の尋常とは余程異っていた。

「ふふん、気狂いは決して治る病気ではありませんよ――」

　と黄色い顔に歴々と冷笑を泛べて、ひどく私を軽蔑するのであった。そして、「気狂いのくせにバタが欲しいなんて斯んな僭越な奴があるでしょうか、ねえ貴方……」ひどく馴れ馴れしく斯う言い乍ら、遂に私をも同腹一味の徒党にして頻りに辰夫の悪口を私と共に語りたいとするのであった。彼奴は発狂の当初妾を殺そうとしたとか、今度彼奴が娑婆へ出たら本当にしめ殺されて了う等とゾッと顫え乍ら、又急に私の顔を眺めてニヤニヤと冷笑を送ったりする。私は仕方がないので、「どうもお気の毒です」とか、「ごもっともです」と至極丁重にお辞儀をして、その日はそれなり帰るのである。私は斯んなに頼りない男であった。

　私は辰夫に、昨日は多忙で君の家へ廻れなかったと伴りを言わねばならなかった。併し毎日頼まれるので、私も根気よく毎日辰夫の母を訪ねた。すると此の女は私の根気に癇癪を起して日毎に私への軽蔑を深め、若し私が、「いや、辰夫は明らかに全快しています」等と言うならば、忽ちギョッと怯えた様をして、私も亦辰夫と共に精神に異常があるのだと頻りに疑ぐり出すのであった。それにも拘らず私は随分根気よく彼処へも通った。そして私は当然拒絶を承知した諦めのいい集金人のように、その頃私は仏教を勉強する堕落生であったが、さながら魚のように機嫌よく街を泳いで埃を浴びていた。そして私は先ず門口に立って店にいる老婦人を見出すと、極めて愛想よくニヤニヤし乍ら、其の日の天候に就て腹蔵ない意見を述べているのであった。そして老婆の悪口と冷笑を一くさり見聞すると、私は丁寧に一礼して、心愉しい人のように帰りはじめるのであった。

　斯の状態が右と左に長く並行して、併し病院の一時間は愈々堪え難いものになった。私達の神経は次第にもつれはじめていた。

　辰夫は何事にも諦めよく深く自らを卑下していたが、自分の家族に就てだけは温い愛を信頼していた。いや、彼は決してそれを信じてはいないのだが、信じようとせずには此の冷い檻の中に生き続ける力が湧かないのである。彼は子供の頃から冷酷な家庭に育ったのだが、それでも矢張り家族の温情を空想せずには檻の中で生きられないものらしい。

　辰夫は初め此の空想が私にさとられることを甚だ怖れていた。ところが私は毎日その母を訪れない振りをして極めて下手に母の冷たさを誤魔化しているものだから、やがて辰夫は其れを見破り、唯一の慰めが裏切られたことに致命的な苦痛を感ぜずにはいられなかった。彼ほどの冷静なかつ聡明な人にして全く可笑しな話であるが、

そこで彼は自分の恥ずべき空想が私に見破られたことを焦慮して、今度は頻りに自分の母は何物にも増して自分を愛していることを私に信じさせ、説服しようとするのであった。檻の中の辰夫の望みが如何に謙虚なものであったか、今私は胆に銘じて記憶している。それにも拘らず、その頃私は愚かであった。（今も――）

扨て辰夫は次第に苛々して、遂には私が如何にも辰夫の母親を誤解し、母親は辰夫を愛しているにも拘らず私は愚鈍で其れを見破るよすがもない、という意味を仄めかそうとするのであった。莫迦な私は逆上して、

「君は実に物の分らない妄想溺惑家だ。今は白状するが、僕は毎日君のお母さんに会っている。併し君の母なる人は凡そ頑迷で、冷淡で、又甚だヒステリイで……」

斯んな風に激しく私は興奮して、もはや我無者羅に喚くようになるのであった。すると辰夫は粛然と襟を正して深く項垂れ、歴々と羞じらう色を見せて悲しげに目を伏せてしまうのだ。私は自分の愚かさに胸を突かれる思いをして、又もや夢中になってしまい、

「併し併し親の心は神秘だから、他人の僕に通じないものが必ずあるに極っている。僕は浅薄で深さの分らない人間だから、君の母を誤解しているに違いない……」

斯うして益々混乱する私は自卑に堪まりかねて、次のように途方もない脈絡もない囈語を喚いてしまったりした。

「僕は本当のことを君に言うが、僕は嘗て君に友情を抱いたことは一度もない。此処へ来るのも自分の打算から来るのであって――」

そして私は、実は私は受付の看護婦に惚れているから此処へ足繁く通うのだと、之は確かに出鱈目であることを保証するが、斯様なことを喚いたりしたのであった。すると辰夫は此等私の無礼極まる言説にも寧ろ益々粛然として、深い自卑と羞らう色を表わして項垂れてしまうから、私は取りつく島もない自卑のあまり前後不覚に狼狽する次第であった。

「ああ！　俺は実に悪者だ……」

私が斯様に断末魔のような呻きを最後に発すると、辰夫は漸く私の腕をしたたかに握って泪を泛べ、

「本当に君に済まない。君のような善良な友達を斯んなにも苦るしめて、僕は怎うしていいか分らない……」

その詠歎を終りとして、私達は暗然と項垂れ合い、扨て私は窓の外へ目を逸らして、今にも空気になろうとする私の身体を感じつづけていた。

この病院の面会室は本来は講堂と称せられる所で、舞台なぞも設けられた二百畳もある程の板敷の部屋であった。その広々とした部屋の隅に、まるで冷めたさに吹き寄せられたようにして一つの卓子と数脚の椅子らしい破れたものが置かれてある。

私が此処へ通ったのは丁度一冬の間、秋の終りから春になろうとする寒い一季節の間であった。私は此の隅にうずくまって暫く一人で待たされる間、重苦しさで身動きも懶い気持になるのであった。すると此の部屋は痛々しい硝子張りの窓ばかりだが、それを通し、何もない庭の土、鈍重な冬の光を冷え冷えといぶしている黒く侘しい土肌と、それを越えて一棟の病室が覗かれ、檻の中では病人達の蠢めく様が眺められた。彼等は演説をしたり、けたたましい笑声を発したり、呂律の廻らない破れそうな流行唄を喚いている。私は此処へ坐らされた瞬間からもう煙のような私、掴まえどころのない憂

鬱と不安とに怯えきって縮んでいた。時々この広々とした板の上を白い看護婦達がスリッパを鳴らして通るのだが、私は眼を上げる気力さえ失うて今にも消滅するようであった。

春が近づいた頃私は辰夫の令兄から甚だ感傷的な、それはまるで小女雑誌の投書のような長文の手紙を受取っていた。それから一週間もして、辰夫は退院することが出来た。辰夫はある私鉄の改札掛となって、間もなく遠方へ越して行った。

一日私は広茫たる水田のほとりへ辰夫を訪れた。折悪しく辰夫は社用で不在だったが、あの神経質な又冷淡な母親を予想していた私は、そこに全く思いがけない物静かな、その温顔に神へのような深い感謝を私に浴せる老いたる母を見出して呆然としていた。私は田園の長い夜道を辿り乍ら、改めて歎息に似た自卑と共に、世に母親ほど端倪すべからざるものはないと教えられた。

青空文庫情報

底本：「風と光と二十の私と・いずこへ」岩波書店、岩波文庫
2008（平成20）年11月14日第1刷発行
2013（平成25）年1月25日第3刷発行
底本の親本：「坂口安吾全集　01」筑摩書房
1999（平成11）年5月20日初版第1刷発行
初出：「東洋・文科　創刊号」花村奨
1932（昭和7）年6月1日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Nana ohbe
校正：酒井裕二
2016年3月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

母

坂口安吾

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/